

大学と行政との地域連携の試み

——名古屋市の魅力映像発信——

柝窪優二*・鄭麗芸*・William M. PETRUSCHAK*

An Attempt at University/Local Government Project Collaboration
—Introducing the Attractions of Nagoya via Student-Produced and Disseminated Videos—

Yuji TOCHIKUBO, Liyun ZHENG and William M. PETRUSCHAK

はじめに

椋山女学園大学文化情報学部メディア情報学科では教員3人（著者）が名古屋市と連携・協力し、地域の魅力や市民サービスなどを映像で発信する地域連携プロジェクトに取り組んでいる。この取り組みは2015年度にスタートし、2018年6月までに長さ5～6分の市政広報映像6本と、その英語版と中国語版（各6本）、計18本の映像作品を制作した。この映像は名古屋市公式動画サイト「なごや動画館 まるはっちゅーぶ」などインターネットで動画公開されているほか、区役所・支所などで上映され、行政の広報活動で使われている。大学と行政との地域連携は近年増えているが、このプロジェクトはテレビ局に広報番組を発注している名古屋市広報課と、映像制作を学ぶ大学生（柝窪ゼミ）とが連携して、クオリティの高い映像で地域情報を発信している点に大きな特徴がある。また在留外国人に広報したい行政側の要望に沿って、日本語のほか英語・中国語の映像を制作している点も特筆すべき点である。こうしたプロジェクトの報告例は全国的にも少ない。そこで本稿では、このプロジェクトの概要や進め方を報告した上で、これまでの取り組みを評価・検証し、大学と行政との地域連携プロジェクトの意義や役割などを考察した。

1. プロジェクトの概要

(1) 目的

このプロジェクトは2015年度に大学（著者：柝窪）から名古屋市に提案する形でスタートした。メディア情報学科・柝窪ゼミでは、2008年度から学生が卒業研究制作として、名古屋市東山動植物園や名古屋市科学館、名古屋港水族館など様々な団体と連携して¹⁾、映像作品を制作してきた。そうしたなか教員（柝窪）としては、教育の場を広げると共

* 文化情報学部 メディア情報学科

に、大学・学生が積極的に社会貢献したいと思い提案した。連携窓口がテレビ局に広報番組を発注している広報課なので、専門性の高い映像の企画・制作が可能で、質の高い教育の場になることを期待した。名古屋市広報課ではこうしたプロジェクトは初めてのケースだったが、若い学生と一緒に市政情報を広報できることや教育に協力できるという視点で、一緒に取り組むことになった。

(2) これまでの取り組み

プロジェクトを開始するにあたり、初年度・2015年度後期に「お試し版」的な形で広報映像1本(①)と、その英語版・中国語版の計3本を制作した。この過程でプロジェクトの進め方や問題点等を確認し、次年度以降に本格的に制作に着手した。年度別の制作本数は下記の通りで、4年目の2018年6月までに、日本語版(①～⑥)とその外国版、計18本を完成した。2018年度後期に日本語版2本(⑦⑧：2019年1月完成予定)を制作中である。

【制作した広報映像】

2015年度〈後期〉	①(日本語版)	①の英語版・中国語版
2016年度〈前期〉	②(日本語版)	②の英語版・中国語版
〈後期〉	③④(日本語版)	
2017年度〈前期〉		③④の英語版・中国語版
〈後期〉	⑤⑥(日本語版)	
2018年度〈前期〉		⑤⑥の英語版・中国語版
〈後期〉	⑦⑧(日本語版)	2019年1月に完成予定

(3) 映像のテーマ

テーマは名古屋市の施設や市民サービスを紹介する下記内容を取り上げた。外国語版は日本語のナレーション・レポート・インタビュー部分と字幕スーパーを英語と中国語に置き換えたもので、映像や作品の長さは同じである。(日本語版の公開時期を表記)

- ①白鳥庭園の魅力～「水の物語」を演出～ 6分00秒(2016年1月公開)
名古屋市熱田区にある白鳥庭園の魅力を学生がレポート
- ②花と灯りでにぎわいを～堀川フラワーフェスティバル～ 6分00秒(2016年7月公開)
毎年春に開催される堀川フラワーフェスティバルを学生が取材・レポートし、名古屋市の中心部を流れる堀川の文化や歴史を紹介
- ③都会のオアシス～久屋大通庭園 フラリエ～ 5分15秒(2017年1月公開)
花と緑に包まれたライフスタイルガーデン「久屋大通庭園 フラリエ」を紹介
- ④市民活動をサポート～名古屋市市民活動推進センター～ 5分15秒(2017年1月公開)
名古屋市市民活動推進センターを学生が取材し、体験レポートも交えて紹介

大学と行政との地域連携の試み

⑤なごやジョブサポートセンター ママサポートコーナー 4分40秒（2018年1月公開）
働きたいママをサポートする「ママサポートコーナー」を学生がレポートで紹介

⑥揚輝荘の魅力～歴史と文化を体感～ 6分45秒（2018年1月公開）
名古屋市千種区にある地域の歴史と文化を伝える揚輝荘を学生が取材・レポート

（2019年1月完成予定：⑦名古屋市職員採用PR映像 ⑧名古屋市美術館紹介映像）

2. 映像制作の取り組み

(1) 役割分担

映像制作は、企画・取材・撮影・映像編集・音声処理・ナレーション・CG字幕・監修・最終仕上げなど、様々な工程が必要になる。大学（枳窪ゼミ）と名古屋市との役割分担を表1にまとめた。

表1 役割分担（◎=担当 ○=一部を担当 △=ごく一部を担当 ×=担当なし）

役割分担	担当 名古屋市広報課 関係する担当職員など	担当 相山女学園大学・枳窪ゼミ 教員+学生（10～15人）
企画	◎ 企画候補案を提案	△ 企画候補案を検討・選定
構成・台本作成	△ アドバイス・修正・確認	◎ 学生と教員で作成
出演者	○ 担当職員など	○ リポーター（学生）2人
取材・撮影	△ 撮影時に職員が立ち会う	◎ 学生+教員で実施
映像編集	×	◎ 学生が担当
ナレーション	×	◎ 学生が担当
CG字幕	×	◎ 学生が担当
音響効果・音声調整	×	◎ 学生が担当
監修	◎	×
最終仕上げ	×	◎
作品の公開	◎ 名古屋市公式サイトで公開 区役所・支所などで上映	◎ 大学 YouTube で公開 学部サイト（学生作品）で公開

(2) 企画

作品テーマは名古屋市広報課が関係部署と調整して大学側に提案している。これまで毎年2本程度のペースで制作してきたが、名古屋市側が毎回3つの作品テーマを提案し、大学側がその中から2つ選んで制作した。名古屋市側は市民に広報したいテーマという視点で企画している。一方、大学側は映像制作に不慣れな3年生ゼミで制作するので、①女子学生の取材・レポートで作りやすいテーマ、②できるだけ1日で撮影できるもの、③社会貢献につながる作品内容、などの基準で選んでいる。

(3) 取材・撮影

作品テーマが決まったあと、撮影日程の調整と撮影台本の作成に入る。1年目の「お試し版」制作のあと2年目以降は、大学ゼミの日程に合わせ、後期に日本語版＝2本を制作、次年度・前期にその外国語版を制作している。撮影は例年9月中旬に実施している。撮影日は大学ゼミで対応可能な日を名古屋市側に提示し、それをもとに調整して決めている。原則として撮影が1日で終わるテーマを選んでいるが、2016年度「堀川」と2017年度「ママサポートコーナー」は追加撮影が各2回必要になり、1本制作するのに計3回撮影した。また2015年度「白鳥庭園」は撮影日に雨が降った関係で、予備日も含め2日間をわたり撮影した。ただしそれ以外は予定通り1日で撮影を完了した。

台本は大学側が作成する。企画打合せや現場の下見をもとに、学生の作成したラフな原稿を教員が修正して台本(案)にまとめる。それを名古屋市広報課が担当部署等に確認して修正箇所を集約し、それを大学側が修正する形で撮影台本にまとめる。経験の少ない学生が台本をもとに取材・撮影するので、できる限り完成度の高い撮影台本を作成している。

撮影は教員とゼミ学生(10人程度)が参加し、名古屋市広報課の担当職員が立ち会う形で実施している。学生は事前に大学で撮影の打合せ・トレーニングをして、ディレクター、カメラマン、リポーター、音声、照明などの役割分担を決め、実際のロケではその役割を担当する。通常、リポーターは学生2人が担当、カメラはメインカメラ1台のほか必要に応じてサブカメラを1～3台使用する。



写真1 撮影風景(久屋大通庭園 フラリエ)

(4) 編集・仕上げ

映像編集は9月下旬から後期ゼミの時間で行っている。1作品についてディレクター・編集を担当する学生を2人決め、大学スタジオの「EDIUS Pro 5」ノンリニア編集システムで行っている。このプロジェクトでは毎回、しっかりした撮影台本を作成しているので、最初に編集用の仮ナレーションを収録し、それに合わせる形で映像をつないでいる。映像編集がほぼ終わったら教員が確認・修正し、そのあと選曲・音声処理や字幕スーパーを挿入して、確認用の仮ナレーションを入れた仮完成版をまとめる。例年、仮完成版は12月中旬までに制作している。

(5) 作品の監修

仮完成版ができたら、名古屋市広報課に内容の確認・監修を依頼する。広報課では担当職員が作品を監修すると共に関係部署に確認して修正箇所を集約する。それをもとに大学側が修正・微調整し、最終の本番ナレーションを収録し、作品を完成させる。例年、12月下旬までに監修を依頼し、1月中旬に作品を最終仕上げ・完成させている。

3. 外国語版の制作

日本語版の完成後、枳窪ゼミが翻訳用台本ベースを作成し、英語版の担当教員（著者：William M. Petruschak）と中国語版の担当教員（著者：鄭麗芸）に翻訳や吹き替え作業を依頼している。翻訳台本にはナレーションとレポート・インタビューのコメント原稿とCG字幕スーパー原稿の両方を、センテンスごとに通し番号を付けて表記し、日本語と翻訳した外国語とが対比できる形にしてある。外国語版の制作過程や留意点は下記の通りである。

(1) 英語版の制作

翻訳は教員（著者：William M. Petruschak）が担当している。ナレーションやレポート・インタビュー部分は、日本語を読む（話す）長さに合わせて、翻訳することが求められる。翻訳した英語を読むと日本語より時間が長くなることが多いので、できるだけ簡潔に、短かい簡単な言葉で翻訳している。時間的な制約から、細かい説明等は内容を理解するのに100%必要でない限り、カットすることが多い。

翻訳では映像を見る人の興味や関心が日本人とは違う可能性があることを想定し、視聴者の予備知識が日本人より少なくとも理解できるように配慮している。たとえば「堀川」作品で【名古屋の発展を支えた三英傑の家紋】という言葉は、【3 famous feudal chieftains who contributed to Nagoya's development, Nobunaga, Hideyoshi, and Ieyasu.】と下線部の言葉を補って翻訳した。これらのコンテンツは名古屋市の広報映像なので、外国人にPR効果がありそうな説明の仕方を意識して翻訳している。

英語の吹き替えは1本目・2本目は全て学生が担当したが、3本目以降は作品のクオリティを維持するため、ナレーションを教員が担当し、レポートとインタビューを学生が担当するように変更した。担当する学生は「海外言語文化演習」などで英語圏に短期留学した経験者が多いが、英語能力が未熟な学生が多い。このため翻訳では、発音しやすい言葉を使うようにして、長い台詞や難しいイントネーションのパターンをできるだけ避けてい

る。収録前に教員が徹底的に指導し、収録当日のスタジオ・リハーサルで学生の到達度を確認し、その場で発音しやすい言葉に変更することもある。ナレーションやリポートコメントは、映像を補足する意味で、できるだけ短く、簡潔に、テンポ良く挿入されていて、密度の高い日本語表現になっている。このため翻訳では、理解するのに本当に必要な情報か、追加説明が必要な場合はどうするか、的確に判断することが求められる。また日本語の原文に含まれている意味合いが十分に伝わるかどうかも重要にポイントになる。

(2) 中国語版の制作

教員（著者：鄭麗芸）が中心になって、本学の学生と中国人留学生などが共同で制作を担当した。制作メンバーは固定せず、作品ごとに担当者を募集した。これまでのメンバーは「海外言語文化演習」（上海：1ヵ月間）と台湾に1年間の留学経験がある日本人学生、中国人留学生、それに本学の姉妹校である上海師範大学から1年又は半年の交換留学で来た中国人留学生などである。教員の指導を受けながら学生が翻訳と中国語の吹き替えをしている。極めてユニークなメンバー構成であるため、それぞれ語学の運用能力や言葉の地域的ニュアンスに相違等がある。このため教員にとっては、常に注意を払い、適切な指導を欠かすことができないが、同時に非常にやりがいのある言語教育の実践でもある。これらの国際交流から生まれた友好の結晶「中国語版制作」からは、以下のような特徴が指摘できる。

① 中日言語の活用と習得

翻訳作業は新しい言語による再制作・リメイクの過程とも言える。中国語翻訳にあたっては、制作担当の学生は日本語のオリジナル映像を理解しながら、中国語を臨機応変に取捨選択する方法を学習し、日本語に合わせる文字数の制限配慮という独特な翻訳のテクニックを身に付けた。また日本語に特有な含蓄のある伝達法に対しては、中国語の接続語を加えることによって分かりやすくなる翻訳方法も習得した。とくに登場人物の男女による語調の相違には工夫を凝らした。本来、語学における文化同時教育は非常に大切な教育法の一つであり、映像における中国語翻訳はまさにこの教育法で、実り多い成果を得ることができた。完成映像を教員の視点で評価するとレベルの高い中国語になったと言える。

② 特殊現場の体験と実践

中国語版制作は日中学生が共同で行った。スタジオという大学では珍しい最新のメディア教育環境で、日本語映像に翻訳した中国語を吹き替えした。その際、翻訳担当の学生は、教員や映像制作者から解説を受け理解を深められただけでなく、切磋琢磨もできたので非常に心強く感じた。さらに、吹き替え時に抑揚頓挫の独特な説話技術もマスターでき、臨場感のあふれる吹き替えが出来上がった。興味深いのは、中国人留学生が中国語版映像の完成後すぐに、その映像を自発的に WeChat などの中国メディアに発信したことである。これは中国語版映像のクオリティが高いだけでなく、留学先の名古屋市・相山女学園大学で日中共同の中国語版制作プロジェクトに参加した達成感やその充実度を物語っている。

③ 地域社会の理解と貢献

学生たちは中国語版制作を通して、名古屋の魅力や文化を勉強したと同時に、日本社会への貢献もできたという大きな喜びが味わえた。この貴重な体験をした学生は、必ず自ら

現在そして将来へ大いに役立たせると考える。帰国した中国人留学生はほぼ日本と関係ある仕事に就職し、日中友好の増進に大役を果たすことに違いない。一方、吹き替えをした日本人学生も自動車会社で中国関係の総合職に就くなど、彼女たちが日中友好の掛け橋になることも充分期待できる。



写真2 外国語版の映像（タイトル部分）

4. 映像の発信・活用

完成映像は、名古屋市が広報活動で実際に使っている。また大学は学生の研究成果として公開している。映像の公開・発信・活用は下記の通りである。

- ・名古屋市公式動画サイト「なごや動画館 まるはっちゅーぶ」（インターネット公開）²⁾
- ・名古屋市の区役所や支所で上映
- ・名古屋市関連施設等で公開（関連 WEB サイト公開も含む、一部の作品だけ）

都会のオアシス—久屋大通庭園 フラリエ—	
	花と緑に包まれたライフスタイルガーデン「久屋大通庭園 フラリエ」(名古屋市)の魅力を紹介しました。この作品は名古屋市広報課と椋山女学園大学 榎窪ゼミが共同で制作しました。(再生時間5分15秒) <2017年2月 椋山女学園大学・榎窪ゼミ制作>
・【動画】都会のオアシス—久屋大通庭園 フラリエ—: YouTube版(外部リンク) ^④	
・【動画】都会のオアシス—久屋大通庭園 フラリエ—(英語版): YouTube版(外部リンク) ^④	
・【動画】都会のオアシス—久屋大通庭園 フラリエ—(中国語版): YouTube版(外部リンク) ^④	
関連リンク	
・久屋大通庭園 フラリエ(外部リンク) ^④	
・椋山女学園大学 YouTube サイト(外部リンク) ^④	
花と灯りでにぎわいを—堀川フラワーフェスティバル—	
	椋山女学園大学と名古屋市広報課が協力し、市政のさまざまな分野の広報映像を制作する第二弾、「堀川」の魅力を紹介する映像が完成しました。椋山女学園大学・榎窪ゼミの学生が、リポーター・カメラ・音声などの役割を分担し、大学のスタジオで編集・ナレーション収録を行いました。(再生時間6分) <2016年7月 椋山女学園大学・榎窪ゼミ制作>
・【動画】花と灯りでにぎわいを—堀川フラワーフェスティバル—: YouTube版(外部リンク) ^④	
・【動画】花と灯りでにぎわいを—堀川フラワーフェスティバル—(英語版): YouTube版(外部リンク) ^④	
・【動画】花と灯りでにぎわいを—堀川フラワーフェスティバル—(中国語版): YouTube版(外部リンク) ^④	

写真3 動画公開サイト「なごや動画館 まるはっちゅーぶ」（抜粋）

- ・栢山女学園大学 YouTube チャンネル (インターネット公開)³⁾
- ・栢山女学園大学文化情報学部サイト (「学生制作の映像作品」: インターネット公開)⁴⁾
- ・なごや学生コラボフェス2017で作品発表 (「名古屋市市民活動センター」映像を紹介)



写真4 なごや学生コラボフェス2017での映像発表

5. プロジェクトの評価

(1) 大学側の評価

4年間のプロジェクトを大学側の視点で評価すると、当初の狙い通りの成果が得られたと受け止めている。映像制作を担当した栢窪ゼミでは、同じ時期に様々な団体とコラボして作品を多数制作したが、指導教員としては名古屋市プロジェクトにおける学生の教育レベルや作品の完成度は高かったと思っている。映像コンテンツは独自に企画・制作する場合は制作者が全て判断して作り上げるが、映像制作会社などでは依頼者（クライアント）の意向をもとに企画・制作するケースが多い。こうした意味では、今回は学生に対してプロダクションと同じような制作環境で指導できた教育効果は大きい。実際の制作現場では、依頼者側の映像に対する要望や意見は重要なファクターになる。依頼者側が妥当性のない（意味のない）要望や意見を主張したときは、制作作業にネガティブに影響し、作品の完成度を低下させることがある。今回は名古屋市広報課がテレビ局に広報番組を企画・発注している専門集団であり、関係部署としっかり連絡・調整し、正しい判断をできる組織だったことが、教育上の大きな成果につながったと考えている。企画者側の判断力は作品の監修段階でも重要なポイントになる。学生への指導も含めて、行政側から信頼できる適切な指摘やアドバイスを頂いたことは、とてもありがたいことだと思っている。

英語版については、広報映像としての役割は十分に果たせたと考えている。英語能力が高くない学生が吹き替えを担当しているが、その部分は日本人学生が話しているシーンなので、日本人が話す英語としては許せる範囲に収まっている。非ネイティブスピーカーが映像を見る場合もあるので、違和感のない、メッセージの伝わる内容になったと受け止めている。参加した学生は英語を専門に学んでいる訳ではない。しかしメディア情報学科なのでコンテンツ制作に関心を持っている学生たちがプロジェクトに参加しており、その学生にとって貴重な経験になり、一定の教育効果は得られたと考えている。

中国語版については、名古屋市やその周辺の在留外国人への広報だけではなく、中国人留学生在が WeChat などの中国メディアに発信したことで、名古屋市を中国に広く紹介することができた。この意義は大きいと思う。中国人留学生は日本文化の窓口として、この映像

に見える名古屋市の魅力を受け止め、中国のネットへ素早く中国語版を発信したことで、日本の地域社会の理解から国際社会への発信という貢献を成し遂げた。このプロジェクトは一石二鳥の教育効果を実現したとも言える。

(2) 行政側の評価

名古屋市側のプロジェクトに対する感想や評価などを担当者にヒアリング調査し、その概要を報告する。それによると完成作品のクオリティは高いと評価している。名古屋市がテレビ局に発注している市政広報番組では、アナウンサーやタレントなどプロが出演しているが、この映像では素人の学生がリポーターを担当している。しかし学生のレポートに違和感はなく、若い世代の市民目線でメッセージを発信している点は好感が持てる。ナレーターも大学側がナレーションを得意な学生を起用していることから、それなりに上手い。

カメラワークや映像のつながり（編集）についても、学生制作だとは思えないほど完成度が高く、音楽なども含めた作品全体のイメージは、広報映像として満足できるレベルだと受け止めている。作品の内容や構成については、事前に打合せをして、双方で撮影台本を修正・確認しているので、行政側が発信したいメッセージがしっかりと伝えられている。名古屋市の市政広報テレビ番組は長さ2分半程度だが、今回の映像は長さ5分程度で伝えられる内容がやや多く、テレビ広報とは違う形で活用できた。「テーマによっては映像のなかに学生らしい演出を取り入れても良いかもしれない」という意見もあった。

完成作品は名古屋市の公式動画サイトでインターネット公開しているほか、名古屋市の区役所・支所などで上映・公開している。寄贈を受けたDVD版は関連の部署・施設等に配り、広報等で必要に応じて使っている。名古屋市としては在留外国人に対する広報活動も重視しているので、英語版と中国語版をできるだけ有効に活用したい。

プロジェクトの進め方は現在のままで問題ない。大学側が年2本程度の制作を希望していて、それで支障はない。広報課としては通常の仕事に加えて、大学とのプロジェクト業務が増えるが、大きな負担になるほどの業務増加にはなっていない。学生がカメラ撮影・編集・最終仕上げまでするので、完成まで3～4ヵ月かかるが、そうした制作期間も問題ない。名古屋市広報課では市政広報テレビ番組のほかに、自主制作映像を映像制作会社に発注している。大学との映像制作は、この自主制作映像の制作期間や企画、打合せ、監修等の工程やその進め方とほぼ同じで、これまでもスムーズに企画・調整できた。

行政側から見たプロジェクトのメリットは、行政の取り組みや施策、地域の魅力などを、若い世代に広く伝えられる点と、制作費が不要で、費用負担なしで広報できる点だと考えている。若い女子学生たちが映像を制作するので、そうした学生はもとより、その友人や関係者などに情報が広がると思う。また学生の視点で制作した映像なので、若い世代に伝わりやすい内容になっていると思う。名古屋市としては大学との共同プロジェクトのメリットや意義は大きく、今後も継続したい。

まとめ

メディア情報学科と名古屋市とのプロジェクトは4年が経過した。これまでの取り組みや成果を振り返ると、大学としては学生に質の高い教育を行うことができ、学生の卒業研

究成果が社会貢献につながる道筋もつけられた。参加した学生にとっては達成感を実感でき、今後の大きな支えになったと思う。

英語版担当の教員としては、英語教育に取り組みながら、社会貢献とは何か常に考えてきた。今回のプロジェクトは、目に見える形で名古屋市の広報活動に貢献でき、英語のコンテンツ制作や英語教育の意義を実感できた。映像に付随する英語なので、日本語で話す(語る)長さと同じ長さになるように翻訳するなど、様々な制約やハードルがあり、難しい部分もあるが有意義な楽しいチャレンジでもあった。「海外言語文化演習」など国際言語・文化教育に力を入れている学部教育との整合性もあり、今後も積極的に続けたいと考えている。英語版制作については現在の進め方で問題等はない。この映像作品はインターネットで世界に発信するので、機会があれば外国人へのメッセージ性の強い作品テーマにも取り組みたい。

中国語版担当の教員としては、制作に参加した日本人学生と中国人留学生、本学の姉妹校・上海師範大学から交換留学でやって来た中国人留学生の教育実践や中日言語の活用に大きな成果があったと受け止めている。こうした中日学生の共同作業による中国語版制作というプロジェクトを通して、社会貢献や国際理解、日中友好の増進を果たせた意義は極めて大きい。2020年東京オリンピック開催に向けて国際交流の機運はさらに高くなるが、これからも名古屋の魅力を中国語・映像で発信するプロジェクトを続け、さらに完成度の高い中国語版映像が制作できるように努めていきたい。

名古屋市としては若い世代に行政の取り組みや施策、街づくりなどについて、積極的に関心を持ってもらいたいと考えている。そうした視点では、若い学生と一緒に広報映像を制作・発信するプロジェクトのメリットや意義は大きい。広報課ではテレビ局に広報番組を発注しているほか、自主制作映像を制作会社に発注している。こうした中で、大学ゼミとの映像制作プロジェクトは制作工程や作業の進め方に違和感はなく、完成映像のクオリティは素人目にはプロとそれほど変わらないほど高い。プロジェクトの成果物として、名古屋市の広報で有効活用できる映像が制作・発信できている。制作過程において、行政側から学生に細かい指示を出した方が良いのか、逆に自由に学生にまかせた方が良いのか、迷うこともある。そうした点については映像制作を指導する大学教員と相談しながら、今後もこのプロジェクトに取り組みたい。

大学と行政、双方の視点でプロジェクトの評価・検証を試みたが、これまでのところ大きな問題はないようだ。大学側としては、映像制作を担当する大学ゼミがその責任をしっかりと果たすことがプロジェクトを継続する重要なポイントになると考えている。このため教員が適切に学生を指導すると共に、制作意欲の高い学生を育てることが大切になる。学生たちは卒業研究としてプロジェクト参加するが、他の卒業研究テーマに比べ、打合せ・下見や取材・撮影、映像編集など、多くの時間が求められる。学生の負担が大きい卒業研究になる。しかし他の大学・学部では学べない実践的な社会貢献につながる魅力的な内容なので、参加を希望する学生は多い。今後、学生の自主性や感性を大切に、その思いを映像に反映するなどして、より充実したプロジェクトになるように努めたい。

近年、大学と地域との協力・連携が重視され、国や地方自治体の支援策も多く、こうした地域連携プロジェクトは広がっている。映像で地域情報を発信する取り組みは、プロ

大学と行政との地域連携の試み

プロジェクトの方向性が明確で、成果物の映像はインターネット等で利用価値が高く、全国的にも増加傾向にある。しかしながら映像制作は様々な専門性が求められ、初心者の学生が広報活動で使えるクオリティの高い作品を制作するのは難しいことだ。このためプロジェクトをスタートしても、双方が満足できる成果やメリットが得られないケースもあり、プロジェクトが継続している例は多くないのが現状のようだ。こうしたなか椋山女学園大学メディア情報学科と名古屋市との地域連携プロジェクトは、東海地区の教育機関や映像メディア関係者から、企画の的確性や制作レベルの高さが評価されている。大学と行政との地域連携の試みは大学におけるメディア教育の新しい方向性を探る可能性を秘めている。今後も関係者の協力を得て、積極的に地域連携による教育実践に取り組み、映像メディアの役割やその可能性を探りたい。

参考文献等

- 1) 枡窪優二「広報ビデオ制作の実践研究—大学と地域との連携事例から—」『椋山女学園大学 文化情報学部紀要 第14巻』, 2015, pp. 73-81
- 2) WEB サイト「なごや動画館 まるはっちゅーぶ」<http://www.city.nagoya.jp/dogakan/>
- 3) 椋山女学園大学 YouTube <https://www.youtube.com/user/SugiyamaUniv>
- 4) 椋山女学園大学文化情報学部サイト（学生制作の映像作品）http://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/media_a/index.html